The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>三木英(編著)『異教のニューカマーたち一日本における移民と宗教』
Author(s)	エルハディディ, アブドエルラヒム
Citation	宗教と社会貢献. 2017, 7(2), p. 45-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65071
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

三木英(編著)
『異教のニューカマーたち―日本における移民と宗教』
森話社、2017 年、A5 判、386 頁、定価 4,800 円＋税

アブドエルラヒム・エルハディディ*

本書は 3 部からなっている。第 1 部（1～5 章）では、日本におけるイスラムとハラールの広がりについて書かれており、第 2 部（6～9 章）では台湾・ベトナム・スリランカを由来とする在日の仏教について、そして第 3 部（10～14 章）では、韓国・ラテン・フィリピン・旧ソ連を由来とする在日のキリスト教について書かれている。

本書が書かれた目的は、以下のとおりである。

> ニューカマー宗教への信仰をシェアする宗教的ニューカマーたちは、彼らが設けた教会や寺で、何をしているのだろう。そして彼らは（彼らにとっては異教の徒である）日本人たちとの間に、いかなる関係を築いているのか（これから築き上げようとしているのか）。それを明らかにすることが本書の目的とするところなのである。（本書 P16）

このように、本書ではニューカマーたちの宗教と活動について注目することが主要なテーマであり、そのテーマを土台として、それぞれの章において様々な話題が論じられている。

以下に、それぞれの章の概要を紹介する。

第 1 章　マスジドと地域社会（著者：三木英）

本章では、日本におけるマスジドと地域社会に焦点をあてている。オイル・ショックまで日本人はイスラムに関心を示してこなかったが、1980 年代頃より、多くのバングラデシュ人とパキスタン人が来日したことにより、イスラムと日本の間に接点が生まれ始めた。

観光客のビザで来日して日本で働くなど、ビジネスをするムスリムが増えており、イスラム世界から日本の大学に留学する学生も増加している。また本章では、マスジドの開堂に際して、反対運動などのトラブルがおこった

*大阪大学大学院人間科学研究科・博士前期課程 2 年・abdo4033@gmail.com

三つの事例があげられている。

第２章　イスラム圏からの観光とハラール（著者：藤田智博）

本章では、著者は観光客として来日する多くのムスリム観光客に対する対応をとりあげている。ムスリムは、宗教的な理由でハラールと礼拝するスペースを求めており、来日するムスリムのために特別な配慮が必要となるため、国・自治体・企業が、ムスリム観光客受け入れのために対応を行っていることが論じられている。

第３章　現代日本における「ハラール」をめぐる諸問題（著者：沼尻正之）

現代日本では、インバウンドとアウトバウンドの両面でいわゆるハラール・ブームが起こっている。本章では、ハラールを認証する団体の分析を行い、これを厳格派と柔軟派と中間派に分けて論じている。これらのハラール認証団体は、それぞれ認証の基準が異なっているため問題が起こりやすい。簡単ではないが、この状況から脱するために、今後に向けて日本国内では統一的な基準を作る必要があると論じられている。

第４章　マスメディアの中の「ハラール」-『朝日新聞』記事の分析-（著者：沼尻正之）

著者は朝日新聞をとりあげ、過去 20 年間、1995 年から 2014 年までのハラールに関する記事の分析を行った。その結果、2001 年を除くとハラールに関する記事が少ないことが明らかになった。2001 年に関連記事が多かったのは、その年に日本の食品メーカー「味の素」が豚由来の酵素を使っていたことが国際問題になったからである。

また、2011 年～2014 年の 84 本の記事の内容について分析が行われており、その内容は 3 つに分類することができる。①訪日ムスリムのハラール食品に対する需要といった、インバウンド関連の記事、②イスラム諸国に食品を輸出する際の課題という、アウトバウンド関連の記事、③文化的な話題、もしくは海外事情紹介である。

ムスリムにとってハラールは信仰上の大事な宗教の問題である。一方メ

ディアはハラールの経済的な面を重視している。そのギャップについて、本章では注意が喚起されている。

第５章　韓国・台湾イスラム事情（著者：三木英）

この章では、韓国と台湾におけるイスラムとムスリムの事情について書かれている。日本と同じく、台湾と韓国においてイスラムは宗教的マイノリティである。韓国にはおよそ 13 万 5000 人のムスリムがいる。その中で、韓国人ムスリムは 3 万 5000 人を数える。また台湾では、およそ 20 万人のムスリムがいる。その中で、華人ムスリムは約 5 万人を数える。ここからは、両国の本土出身のムスリムの比率は日本における日本人ムスリム(約 1 万人)と比較して多少高いことが読み取れる。

また、韓国と台湾においては、政府による多文化共生政策の影響が大きく、政府がイスラムと関わりを持っている。一方日本では、政教分離政策があるためにそのような傾向は見られない。また、韓国には韓国イスラム教中央会(Korea Muslim Federation=KMF)、すなわち韓国ムスリムを代表する機構があり、台湾においても、台湾ムスリムコミュニティを代表する中国回教協会(Chinese Muslim Association=CMA)があるが、このようなムスリムを代表する大きな組織または団体が日本にはないことが論じられている。

第６章　台湾仏教寺院における非宗教的な交わり（著者：三木 英）

台湾仏教は、現代人の生活に役立つように仏教を解釈している。本章では台湾仏教、特に日本に寺を建てた佛光山と中台山の活動がとりあげられている。大阪佛光山においては、信者の 90%が女性であり、オールドカマーの台湾人や日本人の男性と結婚し来日した女性である。寺院はパーティーやカラオケなどといった非宗教的な活動を通して、人々を招き寄せようとしている。普東禅寺は台湾の中台禅寺によって建設された唯一の分院である。普東禅寺では中国語と料理の講座が催される。このように台湾仏教寺院は「人間仏教」を掲げ、非宗教的な活動を重視している。

第７章　設立される待望の故郷 -在日ベトナム人と仏教寺院-（著者：三木

英）

ベトナム戦争の終戦後、来日するベトナム人が増加した。しかしベトナム人は来日した後にすぐベトナム仏教の寺院を設立しなかった。本章では、ベトナム人がすぐに寺院を設立しなかった理由が検討されており、日本にある 4 軒のベトナム仏教の寺院での調査をとおして、この問いへの答えが探求されている。設立できなかった理由は、儀礼を執行し一般の信者たちを指導する役割を果たす存在が確保できなかったからである。また、ベトナムにおいて全国民の 1 割程度の信者しか持たないベトナム本国の仏教界が、外国に拠点をおくことを発想し決断するまでに時間が必要だった可能性もある、と論じられている。

第 8 章　修験道寺院におけるスリランカ仏教の祭り（著者：岡尾将秀）

スリランカの国民の約 70%は上座仏教の信徒である。そのために、彼らが崇敬する開祖ブッダの誕生・悟り・死去を祝うウェサックが開催される 5 月の満月の日は公休日となっている。日本ではウェサックがほとんど開催されないが、大阪近郊の生駒山地にある信貞寺ではウェサックが開催されている。信貞寺の住職はスリランカに関心をもっており、スリランカ人と積極的に交流し、そして在日スリランカ人の強い要求があったからである。ウェサックには、主にスリランカ人が参加しているが、数が少ないとはいえ日本人の参加者も存在している。そして、その際の挨拶はスリランカのシンハラ語と日本語で行われる。

第 9 章　テーラワーダ仏教の日本人による受容（著者：岡尾将秀）

本章ではなぜ「テーラワーダ仏教」が日本人によって受容されたのか、という問いに答えようとしている。テーラワーダ仏教協会はブッダの教えを保ちながらも、現代社会にある問題を実践的に取り込もうとしている。テーラワーダ仏教協会は、慈悲の瞑想、対機説法、ヴィパッサナー瞑想などといった多岐にわたる活動を行っている。これらの活動に参加するのはテーラワーダ仏教徒だけではなく、一般の日本人も参加する。そのために、活動は日本語を用いて行われる。また、長老が書いた書籍や、法話を編集した書籍

の出版により、その書籍を通して興味を持つようになった一般の日本人も多い。

第 10 章　韓国人宣教師にとっての日本宣教-「汝の敵」「隣り人」としての日本-（著者：中西尋子）

日本はキリスト教の宣教が難しい地とされているにも関わらず、なぜ韓国のキリスト教は日本に宣教を行うのか、という疑問に答えるのが本章のテーマである。その理由として、従来の説であった「牧師の供給過剰」を原因とするのではなく、韓国の道徳志向性である「理」がその根底にあると論じられた。また、日本で宣教する 3 人の牧師とのインタビューによって、日本での宣教が消極的意志に基づくものではないことを明らかにした。

第 11 章　なぜ日本人が韓国系キリスト教会の信者になるか -教化方法に着目して-（著者：中西尋子）

本章では、韓国系キリスト教会である大阪オンヌリ教会が取り上げられており、オンヌリ教会の新来者受け入れ態勢と教化過程に注目し、なぜ日本人が韓国系キリスト教会の信者になるのかが論じられている。著者は聞き取り調査を行い、オンヌリ教会における七週の学び、筍、QT、弟子訓練という教化過程が、教会への帰属意識を高めている事を明らかにした。

第 12 章　信仰を介した在日ペルー人の擬似家族 -ペルー人ペンテコステ系教会の事例から-（著者：三木英）

本章ではペルー人が中心になっているペンテコステ系教会が取り上げられており、ペンテコステ系教会である行田、小牧、横須賀の 3 軒で参与観察が行われた。そして、礼拝集会では、参加している人数は少ないものの、子供が参加していることから、家族で信仰を守ろうとしている人々が存在していることが明らかになった。ペンテコステ系教会に通うペルー人はマイノリティの中のマイノリティと言えるので、特に家族の絆を大切にしようとしている。また、礼拝集会がスケジュール通りに時間に行われないこともあるが、そういったところにも、この教会の家族的な雰囲気がうかがえる。

第 13 章　在日フィリピン人とイグレシア・二・クリスト（著者：三木英）

本章では、イグレシア・二・クリストというキリスト教系の新宗教と在日フィリピン人が取り上げられている。イグレシア・二・クリストにおいては、フィリピン人が神の使いとなっており、その中では相互扶助が大切にされている。日本においては 1 万人の信者が存在し、その 8 割がフィリピン人である。イグレシア・二・クリストの教会はタガログ語を用いることで、出身地であるフィリピンを感じることができるようになっている。また、信者に与える礼拝以外の機会がフィリピン人信者の「孤立化の傾向」を解消するように作用していることを明らかにした。

第 14 章　日本における旧ソ連諸国出身者の宗教生活（著者：藤田智博）

本章では、旧ソ連諸国出身者の宗教である正教が取り上げられている。日本と正教との接触は 19 世紀後半からあるものの、信者数はわずか 1 万弱であり、大半の日本人にとっては疎遠な信仰であるという点はニューカマー宗教と共通している。著者はインタビューにより、来日している旧ソ連諸国出身者にとって宗教はどのような役割を果たしているのかを探った。その結果、正教会はネットワークと情報交換の拠点になっていることが明らかになった。

◆◆◆

本書の魅力は、一種類のニューカマーではなく、イスラムや仏教、そしてキリスト教を取り扱うなど多岐にわたっている点にある。そして、身近にあるとは知ってはいるものの、それほどじっくりとは考えないニューカマーたちと、彼らの宗教施設や活動が取り扱われているため、「知りたかったがその機会がなかった」という人々のために情報がまとめられているという点も魅力である。また、その情報自体はフィールドワークでの調査によって集められた情報であるため、ニューカマーたちの宗教施設と活動についての描写は、映像化されているかのように生き生きとしたものになっている。

そして本書は、ニューカマーについて研究する学習者に対して、ニューカマーたちと彼らの宗教的な活動が抱えている様々な課題や視点を提供し、

視野を広げる点でも役にたっているといえる。本書は、日本におけるニューカマーたちの宗教と活動を知るためには不可欠な良書だと言えるだろう。